

2024合同教育研究全道集会 分科会紹介・研究課題

分科会	紹介	研究課題	分科会運営
1	<p>国語教育</p> <p>こぼは「情報」として操作するだけ。文学作品も読まない、作文も書かない。最近の流行のこんな授業は国語教育ではないと怒っているみなさん！本当の意味で生きる糧となる国語教育を、参加者みなでつくりあげてみませんか？(レポートには教材の原文添付を)</p>	<p>(1)国語教育の現状と中心課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 子どもの学力の実態と国語教育の現状 ② 改訂学習指導要領・道徳教育の強制など教科書の問題点と教育課程づくり・自主教材の内容充実 ③ 研究の組織化と日常のとらえ <p>(2)言語教育—小・中・高の関連を明確にして</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 言語の基礎(音声・文字・語彙・文法・漢字漢語教育など)をどう教えるか ② 子どもの言語の学力問題 <p>(3)言語活動教育</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 読み方教育・文学教育(文学的文章・現代文学・古典文学・説明的文学・評論教材)の内容と指導法 ② 作文・つづり方教育(韻文・小論文などを含む) ③ 自主教材の発掘・研究(憲法教育・平和教育・北海道の文学) <p>(4)読み聞かせ・読書活動</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>荒木 美智雄(元北海学園大学非常勤講師) 池田 和彦(深川西高校)</p> <p>市来 健二(乙部小学校)</p> <p>熊木 啓二(小樽双葉高校)</p> <p>幸坂 健太郎(教育大札幌校)</p> <p>東谷 一彦(札幌国際大学非常勤講師)</p> <p>◇司会者</p> <p>平川 美和(北海道作文教育協議会)</p> <p>大澤 信哉(南幌高校)</p> <p>斎藤 欽也(弟子屈町立和琴小学校)</p> <p>戸川 貞之(帯広柏葉高校)</p>
2	<p>外国語教育</p> <p>「グローバル人材」「コミュニケーション能力」「小学校での教科化」「大学入試改革」、現場を揺るがしているこうした教育政策のキーワードをもとに、真の外国語教育の目的を確かめながら、子どもも面白い未来につながる授業づくりを語り合います。</p>	<p>(1)外国語教育の現状と課題 — 児童生徒の学力の実態・外国語教育の現状と今後をとらえ、実践と研究を明らかにする</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 外国語教育の目的と全体構造を明らかにする ② 学習指導要領の問題点を実践的・理論的に明らかにする ③ 小学校での教科(「外国語」)の評価を含め、評価方法と課題を明らかにする ④ 小学校での外国語活動の実態と課題を明らかにする <p>(2)外国語教育の内容と方法</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 言語体系(音声・文字・語彙・文法)の教育内容と方法を明らかにする ② 言語活動(音声コミュニケーションと文字コミュニケーション)の教育内容と方法を明らかにする ③ 取り上げる言語材料の選定・掘り起こしを行い、その指導過程を明らかにする 	<p>◇共同研究者</p> <p>徳長 誠一(旭川西高校)</p> <p>◇司会者</p> <p>古川 正史(豊富中学校)</p> <p>福士 直尚(苫小牧西高校)</p>
3	<p>社会科教育</p> <p>平和で民主的な社会の形成に向け、社会科分科会を開催いたします。現代社会における分断は深刻であり、ウクライナ戦争やコロナ・ワクチン問題が一因と考えられます。私たちはこの問題に取り組む、社会の結びつきを深めるために分科会を開催します。</p> <p>社会科分科会は、民主主義・平和・人権保障の実現を目指す社会を築くための交流の場です。参加者の皆様が持つ知識や経験を活かし、新たな視点を得ることができる貴重な機会となります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。</p>	<p>(1)主権者を育てる社会科・歴史科・公民科の授業や教育課程をどのようにつくるか</p> <p>(2)地域・生活感覚につなげ実感をわかせる教材をどう開発するか</p> <p>(3)背景となるであろう諸科学・学問・社会問題(特に公害や感染症)とどうつなげるか</p> <p>(4)新学習指導要領の新科目や評価等についてどのように取り組んでいくか</p> <p>【午前の部】はレポート報告・検討の時間とします。発表者は、レポートを事前に準備し、参加者は目を通していただきます。当日は、一人の口頭報告は原則5分程度とし、参加者との議論に時間を多くとります。</p> <p>【午後の部】は参加者の関心に合わせてワークショップを中心としたものにします。こうすることで困っている、こんなことをやってみたいのだけど、社会に関心のあるみなさんの声をアウトプットする中で自らが気づく、すっきりした、背中を押してもらえた、アイデアが浮かんだ、そんな時間になればと考えます。</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>角谷 悦章(北海道地理教育研究会)</p> <p>前田 諭音(教育大学札幌校)</p> <p>平井 教子(北海道歴史協)</p> <p>◇司会者</p> <p>清水 悦章(帯広南商業高校)</p> <p>渋谷 美和子(苫小牧市青柳中学校)</p>
4	<p>数学教育</p> <p>「数学は本当におもしろいんだな」という気持ちになる授業をするにはどうしたらよいか」について自由な雰囲気でお話し合い、ちよつとした工夫を持ち寄って、見晴らしのよい数学と数学教育の世界を味わいましょう。</p>	<p>(1)「数学は本当におもしろいんだな」という気持ちにさせるにはどうしたらよいか</p> <p>(2)楽しみながら、数学の世界が見える教材にはどんなものがあるか</p> <p>(3)子どもの学習意欲をもり上げる数学教育とはどんなものがあるか</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>真鍋 和弘(札幌工業高校)</p> <p>成田 收(道教協)</p> <p>酒井 義信(札幌大谷大学)</p> <p>◇司会者</p> <p>清水 真人(市立札幌大通高校)</p> <p>但木 功(道教協)</p> <p>平岩 恒逸(札幌開成中等教育学校)</p>
5	<p>理科教育</p> <p>自然科学の進展によってもたらされる数々の技術は、すべての人々に幸福をもたらすものでなければなりません。しかし、公害・環境問題、原発事故と廃棄物処理などを含むエネルギー問題、気候変動に伴う激甚災害への対応といった諸課題は複雑多岐に絡み合ったひとつの問題としてその深刻さを深めています。北海道の子どもはこの大きな問題を理解し、自分の頭で考えて現代社会を生かす未来を切り開いていかねばなりません。そのためには、自然科学と環境科学の基礎知識を豊かに学ぶことのできる教材・教育内容、教育課程が必要です。子どもがいきいきと活動して学ぶことができる授業づくりについて多様な視点から討議しましょう。</p>	<p>(1)子どもが楽しみながら自然科学や環境科学の基礎を着実に学ぶことができる授業をどのようにつくるか</p> <p>(2)子どもと教師の意欲を引き出す、わくわく実験やものづくり教材をどのように開発するか</p> <p>(3)「地域の自然」「環境に関する諸問題をどのように教材化するか</p> <p>(4)「自然科学教育が育てる学力」「環境科学教育が育てる学力」を身につけることができる教育課程をどのようにつくるか</p> <p>(5)教員・研究者・地域住民の横の連携、ネットワークを深める仕組みをどのようにつくるか</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>大野 栄三(北海道大学)</p> <p>境 智洋(教育大釧路校)</p> <p>田中 邦明(教育大函館校)</p> <p>江見 清次郎(元北海道大学)</p> <p>金澤 裕司(羅臼町教育委員会)</p> <p>◇司会者</p> <p>篠原 暁(沼田化石友の会)</p> <p>山中 武彦(根室市おらちい義務教育学校)</p> <p>内田 耕平(静内高校)</p> <p>宗像 利志(室蘭清水丘高校)</p> <p>三好 敬一(札幌開成高校)</p>
6	<p>美術教育</p> <p>美術教育は豊かな人間性を育むと共に、多様な価値観や、創造性を他者と共有し相互に認め合える教科です。学力のあり方が変わろうとしている中、授業や特別活動を通じ、子どもたちとの関わりについて語り合います。</p>	<p>(1) 子どもたちを取り巻く様々な状況・実態を明らかにし、美術教育によって身につけることのできる力をどのように育ててゆくかを現場の実践を通して研究を深める。</p> <p>(2) 作品制作や鑑賞を通じ、子どもたちが主体的に自己の感性を高め、達成感や心からの感動を味わうことのできる授業や教材などを研究する。</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>上野 秀美(釧路江南高校)</p> <p>十河 幸吾(江差高校)</p> <p>大崎 智尊(恵庭北高校)</p> <p>茶谷 裕樹(名古屋市立智恵文中学校)</p>
7	<p>書写・書教育</p> <p>小学生の毛筆指導から高校生の作品展示まで、幅広い参加者ニーズに応える分科会を目指しています。</p>	<p>(1) 正しく美しい文字を書きたい、思いや感情を込めた文字表現をしたい、自己の存在を何らかの形で確かめたいという子どもたちへの指導・援助のあり方を探る</p> <p>(2) 「生きる力」や「自己肯定感」について、子どもたちの作品を通じて考える</p> <p>(3) 子どもたちをとりまく今日の社会や教育の現状を検討し、子どもたちの「育ち」にとって、書教育がもつ可能性について検討する</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>磯角 広一(苫小牧西高校)</p> <p>野坂 武秀(元教員)</p> <p>◇司会者</p> <p>中谷 幸代(砂川高校)</p>
8	<p>音楽教育</p> <p>音楽は、人が豊かに生きていくために欠かすことのできない文化です。音楽の授業は、子どもと教師が教材を真ん中にして文化を育む場です。ささやかでも、普段着の実践を持ち寄り、語り、歌い、学び合います。授業等で録音・録画した物を持ち寄ります。</p>	<p>(1) 音楽教育の問題点とその解決の方向性を明らかにする</p> <p>(2) 生きいきとした音楽の授業はどのようにつくれるのか</p> <p>そのための教材、子どもの見方、目標の設定と評価、授業方法を実践的に解明していく</p> <p>(3) 主体的な全校音楽文化活動のあり方とその実践づくり</p> <p>(4) 子どもの成長発達に即した音楽教育の展望を明らかにする</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>石窪 満(播磨町立公立中学校)</p> <p>渡辺 健(札幌市立新栄小学校)</p> <p>◇司会者</p> <p>山口 政世(釧路市立鶴野小学校)</p> <p>富田 暁美(東川町立東川第三小学校)</p>
9	<p>技術・職業と進路指導</p> <p>各教科・科目の専門性を活かし、地域と連携した多くの実践や、進路指導、労働問題などの実践を積み上げてきました。身近な問題などを中心に数多くの実践を持ち帰り、学び合います。</p>	<p>(1) 技術・職業教育をめぐる状況</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 生徒をとりまく状況(学習・生活・進路) ② 教育条件の整備と北海道の教育政策 ③ 学校間連携・地域との連携 ④ 技術・職業教育とキャリア教育 ⑤ 技術・職業教育と進路指導 <p>(2) 教育実践と学校づくり</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 中学校の教育実践(技術科) ② 高等学校の実践教育(専門学科・総合学科・普通科) ③ 職業教育・職業訓練と学力保障 	<p>◇共同研究者</p> <p>上原 慎一(北海道大学)</p> <p>倉部 静雄(岩見沢緑陵高校)</p> <p>佐々木 貴文(北海道大学)</p> <p>◇司会者</p> <p>内倉 俊男(厚沢部中学校)</p> <p>工藤 英太郎(釧路商業高校)</p> <p>清水 正貴(小樽未来創造高校)</p> <p>樋上 諭(旭川工業高校)</p>
10	<p>家庭科教育</p> <p>生命と生活の再生産にかかわる学習を担う家庭科は、子どもが直面する生活の困難にどのように向き、何を提起していくべきなのだろうか。現在と将来にわたる生活の主人公を育てるため、大いに意見交換しましょう。</p>	<p>(1) 総合的に学ぶ家庭科で子どもが主体となる学びをどうつくるか</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 子どもの生活の現状をどうとらえるか ② 小・中・高の現状はどうなっているか ③ 家庭科における子ども主体の学びをどうつくるか <p>(2) これからの家庭科教育</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 学習指導要領・教科書と家庭科 ② 家庭科教育に関わる条件整備 	<p>◇共同研究者</p> <p>石川 幸孝(岩内高校)</p> <p>岩佐 美和子(新十津川農業)</p> <p>増淵 哲子(教育大札幌校)</p> <p>丸尾 恵(清里町立清里中学校)</p> <p>◇司会者</p> <p>山下 恵子(教育大札幌校)</p> <p>福岡 あゆみ(鶴川高校)</p>

分科会	紹介	研究課題	分科会運営
11 保健・体育教育	子どもの健康・発達を語り合い、いかに子どもの命や体を守り育てていくのか交流しましょう。また、食・健康・運動文化の主人公に相應しい力をすべての子どもに保障する教育を考えましょう。学校保健の実践的課題や現状を、意見交換しましょう。	<p>《保健体育分科会》</p> <p>(1)教育課程の編成と改善・充実</p> <p>(2)保健体育の授業研究、実践交流と今後の課題</p> <p>① 体育の授業実践の交流</p> <p>② 誰でもできる授業の交流</p> <p>(3)部活動・少年団・体育的行事の実践交流</p> <p>《学校保健分科会》</p> <p>(1)学校保健の実践的課題</p> <p>① 子どもの健康・発達を保障する健康診断をどう創造していくか</p> <p>② 健康認識をどう育てるか</p> <p>③ 様々な発達課題に向き合う子ども・青年の自立をどう援助するか</p> <p>④ 自主的な保健委員会活動をどう育てるか</p> <p>⑤ 民主的な学校保健づくりと地域・父母との連携</p> <p>(2)学校保健の現状と課題</p> <p>① 新型コロナ感染症対策の経過と今後の課題</p> <p>② 子どもの健康・発達実態とその課題</p> <p>③ 健康診断、予防接種、スクールカウンセラー、特別支援教育のあり方、いじめ問題をめぐる状況の交流</p> <p>④ 保健指導(性教育を含む)の実践交流</p> <p>⑤ 脱ゆとり教育・学力偏重主義が子どもたちに与える影響と課題</p> <p>⑥ 学校保健をめぐる教育条件と養護教諭の権利問題の現状と課題</p> <p>⑦ 全校配置・複数配置運動前進のためのとりくみ</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>白山 尚(奥尻町立奥尻中学校)</p> <p>米谷 豊彦(別海町立風連小学校)</p> <p>中村 文恵(旭川市立愛宕東小学校)</p> <p>高松 葉子(旭川商業高校)</p> <p>◇司会者</p> <p>五十嵐 淳一(学校体育研究同協会)</p> <p>十河 久美子(江差町立南が丘小学校)</p> <p>中道 真由美(石狩翔陽高校)</p>
12 総合学習・生活科	「何を学ぶか」「なぜ学ぶか」という視点からの授業づくりが、総合学習・生活科の実践を豊かにしていく報告が近年増えています。「深い学び」を実現する生活・総合実践について語り合しましょう。	<p>(1)「総合」の授業づくりにおけるアプローチとその成果についての検討</p> <p>① 学習者の要求(学びたいこと)と教師の要求(学ばせたいこと)の統一にどうとらんだのか</p> <p>② 目標設定における知識・技能・情意の統一にどうとらんだのか</p> <p>③ 子どもごとのような力がついたのか、その検証はどのように行っているのか</p> <p>(2)「生活」の授業づくりにおけるアプローチとその成果についての検討</p> <p>－ 特に体験によって学ばれたことを、具体的に子どもの学習の成果から厳密に検証を図る</p> <p>(3)総合・生活科と、学校づくりや教育課程との関係の在り方を探る</p> <p>(4)私たちが、総合・生活科でつきたい「学力」とは何か?</p> <p>① 地域の学力とは何か</p> <p>② 誰の、何のための学力か</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>前田 賢次(教育大札幌校)</p> <p>村越 含博(文教大学)</p> <p>山口アナン真美(教育大札幌校)</p> <p>◇司会者</p> <p>山本 仁史(斜里小学校)</p> <p>山本 民(利尻町吉形小学校)</p>
13 道徳教育	「道徳科」が教科書を使用している全面実施になり、「教科書の内容と子どもたちの実態が合わない」といった課題や困難さも浮き彫りになってきています。また高校では実質的に「道徳科」に位置づけられる「公共」が今年度から始まっています。「特別の教科 道徳」が特定の政治的意図とそれに基づく圧力によって出現したことで、道徳的な問題を考えた実践が子どもたちの発達・人格形成にとって意味があることとの区別が必要です。内容項目の再編によって、「感じる」が「知る」、「役に立つ喜びを知る」が「役に立つ」などと変化してきています。教育は人格の完成を目指すことが目的であり、道徳性は「道徳科」だけで育てることはできません。子どもたちの道徳性を育むさまざまな教育活動のとりくみを、発表レポートにしっかりと光をあてて、その内容を尊重した交流・論議を行っていきます。	<p>「子どもたちの実態・背景を踏まえた道徳の授業づくりの探求」</p> <p>(1)はじめに</p> <p>共同研究者から、分科会の経過、今年の課題、主な論点などについて基調提案を受けます。そのあと、参加者の地域・学校での状況を交流します。</p> <p>(2)道徳教育実践の交流</p> <p>①「道徳科」「公共」の授業実践の発表と交流</p> <p>Ⅰ小学校 Ⅱ中学校 Ⅲ高校 Ⅳその他</p> <p>②合科・横断的・全面主義としての道徳教育実践の発表と交流</p> <p>(3)道徳教育の全体計画や「道徳科」「公共」の年間指導計画などに関わる発表と交流</p> <p>①子どもの姿と道徳教育の諸計画づくり・実践づくり・運営体制などについて</p> <p>②「道徳科」「公共」をめぐる校外外研究のとりくみと課題</p> <p>(4)その他、道徳教育に関わる参加者の意見交流</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>塚本 智宏(東海大学札幌校舎)</p> <p>山田 真由美(教育大札幌校)</p> <p>◇司会者</p> <p>遠藤 玄(宗谷教組)</p> <p>中村 哲也(幌加内町朱鞠内小学校)</p>
14 学校と家庭の生活指導	子どもたちの声を聞き、子どもたちを大切に育てる学級づくり、授業づくりなどの実践を交流します。学校を息苦しくさせるゼロトランス、学校スタンダードなどの一斉指導、拡がる格差と貧困、いま、必要な生活指導、子ども支援は何かを討論します。	<p>(1)北海道の各地域に見られる子どもの生活状況</p> <p>① 子どもと家庭の「貧困」状況と子どもの発達について考える</p> <p>② 学力テスト体制のもとでの「学力」向上政策、管理を徹底するゼロトランスによって子どもたちの発達はどうかしているのかを考える</p> <p>(2)安心できる居場所づくりと自信を生み出す活動</p> <p>①「学校」「教室」に安心できる居場所をどのようにつくり出したのか</p> <p>② 子どもたちそれぞれの発達要求にもつづいた自信を生み出す活動をどのようにつくり出したのか</p> <p>(3)子どもの現実と響き合う自治活動</p> <p>① クラスづくりや学校づくりの中で、子どもの自治活動をどのようにつくり出したのか</p> <p>② 『遊び』『学び』を通して、平和的で共感的な世界をどのようにつくり出したのか</p> <p>(4)子どもをまん中において共同づくり</p> <p>① 子育て・教育の悩みを語り合う共同、子どもの発達を支援するネットワークをどのようにつくるか</p> <p>② 地域に求められる学校づくりをどのようにすすめるか</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>黒谷 和志(教育大旭川校)</p> <p>瓜屋 謙(道徳校)</p> <p>橋本 尚典(全生研北海道支部)</p> <p>井上 大樹(札幌学院大学)</p> <p>◇司会者</p> <p>石森 由香利(小樽桜陽高校)</p> <p>佐藤 理河(旭川永嶺高校)</p> <p>平本 佳也(芽室小学校)</p>
15 教育条件確立の運動	ゆきとどいた教育の実現には、「人・物・予算」の裏付け、すなわち教育条件整備が不可欠です。教育予算や教育費負担、学校統廃合、教職員定数増と労働条件改善など、切実な課題について学び、語り合しましょう。	<p>(1)国と地方、地方自治体の教育予算の問題点と子ども・教育への影響</p> <p>① 義務教育費国庫負担金や就学援助費の削減、学校統廃合・学校現業職「委託化」・「道立学校支援室」設置とその影響、私学助成の抑制と実態など</p> <p>② 「貧困と格差」拡大が子ども・教育に及ぼす影響、「高校就学支援金制度」問題、給食費・教材費などの学校徴収金の実態など</p> <p>(2)教育費無償化、ゆきとどいた教育を求める運動の進め方</p> <p>① 少人数学級の実現、教職員定数増と労働条件の改善</p> <p>② 子どもの学習権と地域の教育を守る運動</p> <p>③ 子ども・青年の修学保障、私学助成の拡充など教育予算充実の運動</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>栗野 正紀(教育大学札幌校)</p> <p>横山 傑(苫小牧工業高校)</p> <p>◇司会者</p> <p>菅野 喜文(岩見沢市立美園小学校)</p>
16 教育課程・学校づくり	子どもを中心とした教育課程を、教職員・子ども・保護者・地域が力をあわせてつくっていくために、お互いの実践や思いを交流しましょう。また、様々な課題をかかえる子ども達の実態や育課程についても、じっくり語り合しましょう。	<p>(1)子どもの人格形成を保障する教育課程・学校づくりの課題</p> <p>① 確かな学力と発達を保障する授業</p> <p>② 子どもの自治能力を育むHR活動・生徒会活動</p> <p>③ 憲法・子どもの権利条約にもとづき、子どもの人格形成を保障する教育課程</p> <p>(2)子ども・保護者・教職員・地域による共同の教育課程・学校づくりの課題</p> <p>① 教育の自由や教職員の同僚性を回復するために、学校の閉塞感、教職員の多忙化や苦悩をどう跳ね返していくか</p> <p>② 保護者・地域の参加による共同の教育課程・学校づくりのシステムをどうつくるか</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>奥田 あけみ(元北星学園余市高校)</p> <p>内藤 修司(稚内東小学校)</p> <p>河野 和枝(さっぽろ子育てネットワーク)</p> <p>◇司会者</p> <p>米家 直子(幕別清陵高校)</p> <p>渡来 和夫(北見北斗高校)</p>
17 地域づくりと子育て・教育・文化・スポーツ	現代社会にみる生活・学力格差、貧困・差別等の社会問題を解決することは喫緊の課題です。満足な食事が出来ない、授業料を払えないなど子どもにとって成長・発達を阻害する大きな要因となっています。「子どもの生きづらさ」に正面から向き合う子育て・教育・文化・スポーツを考えあひます。	<p>(1)学校・家庭・地域の新たな動きと子育て・教育</p> <p>① 新自由主義に基づく教育体制の再編と学校・家庭・地域の課題(先生と親・保護者の連帯活動)</p> <p>② 子どもの生きづらさの実態把握と地域協同活動(学習支援、子ども食堂など)</p> <p>③ 地域の居場所活動と子育て仲間づくり(地域子育てネットワークの拡充)</p> <p>④ 子どもが育つ地域づくり(地域の教育力向上へ)</p> <p>(2)文化・スポーツ活動をすべての子どもたちに</p> <p>① 子どもの人格形成を保障する文化・スポーツ活動の充実課題</p> <p>② 学校教育課程と文化・スポーツ活動を検証する</p> <p>③ すべての子どもが享受する文化・スポーツ活動を創造する</p> <p>④ 子ども、親・保護者、地域住民が楽しく参加する文化・スポーツ活動の取り組み</p>	<p>◇共同研究者</p> <p>大坂 祐二(名寄市立大学)</p> <p>河野 和枝(さっぽろ子育てネットワーク)</p> <p>櫻井 幹二(高校教育研究所)</p> <p>◇司会者</p> <p>佐々木 一丈(札幌市立築西小学校)</p> <p>沢村 紀子(さっぽろ子育てネットワーク)</p>

分科会	紹介	研究課題	分科会運営
19	<p>国民のための大学づくり</p> <p>政府は「高大接続改革」「高等教育無償化」により、高校教育、大学入試、そして大学のあり方を劇的に変えようとしています。統制・競争・分断の政策を乗り越え、自由な学問と青年期の発達保障のあるべき姿を探ります。</p>	<p>(1) 政府の大学に対する統制・再編政策、高大接続と大学改革の動向、それらが教育に及ぼす影響を明らかにする</p> <p>① 高校生の学力と高校教育の変化、大学教育への影響</p> <p>② 大学入試制度改革の動向(新共通テスト・英語民間試験の利用・個別試験の改革・調査書利用の拡大・受験産業の影響)</p> <p>③ グローバル企業への要求と経済政策への従属を強める大学政策の動向(「グローバル人材」「専門職大学」「文系廃止」)</p> <p>④ 目標・評価と経営改革を通じた統制(「ガバナンス改革」)は、教育・研究の現場に何をもたらしているか</p> <p>⑤ 大学統廃合(法人統合、研究・教育組織再編)の動向と問題点</p> <p>⑥ 教員養成・研修政策(教員養成・資格制度、免許更新制、教職大学院)の動向と問題点を解明する</p> <p>(2) 国民のための大学創造のとり組み、実践的課題</p> <p>① 科学者と大学の社会的責任—研究不正、東日本大震災・福島第一原発事故の教訓</p> <p>② 誰もが学ぶことのできる高等教育の創造(無償高等教育の実現、公費支出の拡充、生涯教育との連携)</p> <p>③ 望ましい「高大接続」のあり方の探究(大学との関係を視野に入れた高校の学習・進路指導、高大連携)</p> <p>④ 学生・教職員協働による研究・教育の創造</p> <p>⑤ 学生の進路と社会的権利の保障(コロナ危機における学生支援)</p> <p>⑥ 教職員の賃金、健康、労働条件を守るとり組み</p>	<p>◇共同研究者 姉崎 洋一(北海道大学名誉教授) 片山 一義(札幌学院大学) 木戸口 正宏(教育大創路校) 白木沢 旭児(北海道大学) 光本 滋(北海道大学)</p> <p>◇司会者 中川 大(教育大札幌校)</p>
20	<p>障害児・障害者の教育と福祉</p> <p>小中学校、特別支援学校、高等学校、学齢期後(卒業後あるいは青年期から高齢期まで家族を含んだ)実践・課題を各生活年齢や発達段階のつながりを考えてレポート討論を行います。各レポートを総合的に討議できる分科会を構成し、各分科会で討議された成果や課題については全体会で共有し、研究課題を深めていきます。</p>	<p>(1) 小中学校における特別支援教育の実践と課題</p> <p>① 通常学級における特別な支援や配慮の必要な子供の教育と課題</p> <p>② 通級指導教室の教育の現状と課題</p> <p>③ 特別支援学級における交流及び共同学習と通常の学級における特別支援教育(インクルーシブな授業)。</p> <p>特別支援教育とインクルーシブ教育。</p> <p>④ 障がい児学級の教育の現状と課題</p> <p>(2) 障害児学校における教育実践と課題</p> <p>① 乳幼児期から学齢期における相談・保育・福祉の現状と課題</p> <p>② 訪問教育、医療的ケア、重症心身障害児の教育の現状と課題</p> <p>③ 各障害種別における教育の現状と課題</p> <p>④ 重複障害児の教育の現状と課題</p> <p>⑤ 寄宿舎教育の役割と教育実践</p> <p>(3) 青年期から高齢期までにおける特別な支援や配慮の必要な人の教育及び就労・社会参加、生活に関わる課題。</p> <p>① 高等部の在り方～入学希望者の多様化と入学選考の在り方、入学後の課題</p> <p>② 高等部の教育実践、進路保障、専攻科の課題</p> <p>③ 通常高等学校における特別な支援や配慮の必要な人の教育の現状と課題</p> <p>④ 障害者総合支援法の問題点と労働、発達を考えた生活保障の問題</p> <p>⑤ 卒業後の新たな取り組みの実践と課題</p> <p>⑥ 高齢期における課題の整理(家族の問題、生活の質の変化)</p> <p>(4) 共通課題</p> <p>① 教育計画と教育評価の諸問題</p> <p>② 特別支援学校の教室不足など障害児教育の教育条件に関わる諸問題</p> <p>③ 子どもの発達・ねがいに応じた教育実践</p> <p>④ 障害児教育におけるICT機器利用促進施策の現状と課題</p>	<p>◇共同研究者 小野川 文子(教育大創路校) 小淵 隆司(教育大創路校) 加藤 法子(社会福祉法人楡の会) 戸田 竜也(教育大創路校) 田中 雅子(教育大創路校) 二通 諭(大谷大学) 渡邊 礼(札幌学院大学) 北村 典幸(旭川市立大学) 藤野 友紀(札幌学院大学) 大橋 伸和(ピアサポーター)</p> <p>◇司会者 市橋 博子(余市養護学校) 藤田 明宏(育成会) 藤田 素子(手福養護学校三角山分校) 村井 文(苫小牧支援学校) 谷代 晃子(美瑛養護学校) 遠藤 美由樹(北檜山小学校) 鈴木 恵美子(根室教組)</p>
22	<p>平和・憲法、人権・民族と教育</p> <p>予断を許さない「憲法改正議論」。これに対する実践と理論を学びあひましよう。</p> <p>※2024年度「人権・民族と教育」の分科会は、第3分科会・社会科教育と共同開催とします。</p>	<p>《平和・憲法と教育》分科会</p> <p>① これまでの「戦争のできる国作り」とこれからの「改憲」への動きに対して私たちの理論立てをどう進めていくのか。</p> <p>② 戦後74年を経て、日本の「文化としての平和」をどのように継続していくか。</p> <p>《人権・民族と教育》分科会</p> <p>(1) アイヌ民族その他の民族的少数者が日本社会の中で直面している課題を明らかにし、その克服のすじみちを考えます。</p> <p>(2) アイヌ民族その他の民族的少数者の歴史と現状にかかわる課題を、教育実践としてどう取りあげたか、その成果を交流します。</p> <p>(3) 国際社会や国内情勢の中で、少数者であるために、差別・無視・排除など様々な「人権」侵害に遭遇している人々の例について理解を深め、「人権」感覚の深化と、つながり合う行動への契機を探ります。</p>	<p>◇共同研究者 神保 大地(自由法曹団) 清末 愛紗(室蘭工業大学) 池田 賢太(自由法曹団) 阿知良 洋平(室蘭工業大学) 原島 剛夫(ほっかい新報) 清水 裕二(少数民族懇談会)</p> <p>◇司会者 菊池 俊造(高退校) 野上 徹哉(江別高校) 滝沢 正(道産教協)</p>
23	<p>子ども・青年の発達と教育</p> <p>子どもや青年の「発達援助」に携わる大人として、何ができるかを共に考え語り合う分科会です。保育、小・中学校、高等学校、フリースクールなど、乳幼児期から青年期までの長いスパンで「人の発達」を見通し、子ども理解をより豊かなものにしていきましょう。</p>	<p>(1) 今、子ども・青年が生きている場(地域・家庭・学校など)はどうなっているか。</p> <p>① 子ども・青年の文章などから、「声」を聴きとり、実態をつかむ。</p> <p>② 多様な発達援助職(保育士、小学校・中学校・高等学校教員、特別支援学校教員、フリースクール指導員、専門学校教員など)の実感から学び、交流しあう。</p> <p>(2) 子ども・青年の発達を支え、援助するとはどういうことか。実践報告に学び、共有・分析し、発達援助のあり方を総合的に検討する。</p> <p>(3) 子ども・青年の発達援助に関わる人々の困難と希望について話し合う。学校教育だけではなく、幅広い発達援助職に携わる方々との対話を通して、連携と協働のあり方を探る。</p> <p>* 乳幼児期から青年期までの長いスパンで、子ども・青年の発達をどう考え、考えることのできる、この分科会の価値や独自性を尊重し充実した議論をしていきたい。</p>	<p>◇共同研究者 池田 考司(札幌学院大学) 庄井 良信(教育大札幌校)</p> <p>◇司会者 中里 明達(伊達西小学校) 吉田 圭子(札幌市立栄町中学校)</p>
24	<p>不登校・高校中退・ひきこもり</p> <p>新型コロナウイルス感染症は子どもの生活環境に大きな影響を与え、生活に困難する世帯も増加し、今まで以上に、不登校の子どもやひきこもりの青年に安心して成長できる居場所が求められます。親の困難な生活実態や「教育機会確保法」の検討を深め、学校現場のとり組み、親の会、支援団体の努力を語り合ひましよう。</p>	<p>(1) コロナ禍3年目、子ども・青年のリアルな現状</p> <p>① コロナ禍における教育現場、教育課程の管理的押しつけ、ITC教育の問題</p> <p>② 生活困窮家庭の子どもの親の「困難性」</p> <p>③ 「教育機会確保法」「子ども・若者育成支援推進法」の理解</p> <p>(2) フリースクール等の居場所と支援・援助の現状について</p> <p>① 不登校・登校拒否全国連絡会から、コロナ禍での支援の現状</p> <p>② 全道フリースクール支援団体の取り組みの変化</p> <p>③ 特別支援学校、義務制特別支援教室等の子どもと親の困難</p> <p>(3) 青年期以降の支援や新たな課題</p> <p>① 引きこもり者へのアウトリーチと、就労・公的福祉支援の展望</p> <p>② 引きこもり者支援の長期化等の諸問題</p>	<p>◇共同研究者 田中 教(北星学園大学附属高校) 門前 真理子(不登校の子どもをもつ親の会 トボス) 山田 大樹(NPO法人 訪問と居場所 凜流教室)</p> <p>◇司会者 新保 教(元高校教員) 多田 和夫(元小学校教員)</p>